慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	児童期後期から青年期の自尊感情と挫折経験との関連
Sub Title	
Author	神原, 知愛(Kanbara, Chiai)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2010
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.70 (2010.) ,p.196- 200
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成21年度博士学課程生研究支援プログラム研究成課報告書
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000070-0196

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れる。

実験の問題点としては，刺激文の解釈があいまいであり，対象言語を母語とする者からですら，期待する解釈を引き出しにくい，という点が挙げられる[6)]。したがってL2獲得者の知識を適切に引き出せたかどうか，疑問が残る。今後はこの点に配慮し，刺激文の選定を行う必要がある。

4.　省略構文の獲得段階に対する提言

本研究では，獲得にかかわる言語情報や内的仕組みについてできるだけ具体的な提案をしたことで，省略構文の獲得ついて，以下の3つの提案をすることが可能である。(i)省略構文の獲得には段階がある，(ii)日本語タイプの言語を母語とする獲得者が英語タイプの省略構文を獲得する際，英語ではかきまぜ構文が許されない，という否定情報が必要である，(iii)英語タイプの言語を母語とする獲得者が日本語タイプの省略構文を獲得する際，日本語ではかきまぜ構文が許される，という肯定情報が必要である。

本研究の目的は，効果的教授法や学習法を明らかにすることではない。したがってその研究成果が，省略構文の教授法や学習法に対し直接的な提案をすることは困難である。しかし上記の提案は，省略構文の効果的教授法や学習法を探る上での判断材料の一つとして捉えられるであろう。特に(ii)については，獲得者が否定情報を利用できる可能性を示した，という点において重要な提案と言える。

注

1)　ある形式が文法的ではないという情報を獲得者が取り込み，それを文法獲得のために用いた場合，その情報を否定証拠と呼ぶ。
2)　ある形式が文法的であるという情報を獲得者が取り込み，それを文法獲得のために用いた場合，その情報を肯定証拠と呼ぶ。
3)　例文の前につけられた*は，その例文が非文であることを示す。
4)　実際の実験では，この文は使用していない。
5)　この被験者は予測と合致しないが，単文でのかきまぜ構文のテストの正答率は90%を越えていたことから，かきまぜ構文についての知識ではなく，埋め込み文についての知識が欠如していた可能性がある。
6)　他にもいくつか問題点はあるが，本報告書では最も重要な点のみを取り上げた。

参考文献

Boškovič, Ž. and D. Takahashi. 1998. Scrambling and last resort. *Linguistic Inquiry* 29, 347–366.

Oku, S. 1998. LF copy analysis of Japanese null argument. In *The Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*, M. C. Gruber et al. (eds.), 299–314. Chicago Linguistic Society.

児童期後期から青年期の自尊感情と挫折経験との関連[1)]

神　原　知　愛

問題と目的

青年期では，これまで経験したことのない新しい経験に出会いやすく，そこで自己の未熟さを知って

自尊感情が揺れる場合が多い（溝上, 1999）。そのような自尊感情の揺れは，自分が価値を置いて重要視している領域での肯定的または否定的出来事によって生じる(Crocker & Wolf, 2001)。そこで，自分にとって重要なことでつまずき，もしくは，つまずかざるを得ず，それによって自己や環境をとらえ直さなければならないような「挫折」（神原, 2010）を青年期で経験することは，その時期の自尊感情に影響を与えることが考えられる。しかし，青年期の挫折経験と自尊感情との関連を扱った研究は，今までにない。

したがって，本研究では，児童期から青年期への過渡期にいる小学校高学年の子どもから青年期の高校生までを対象に，これまでにどれくらい挫折を経験してきたかという挫折経験の頻度と自尊感情との関連を検討する。その際，小学校高学年から高校までの発達的特徴に着目する。

方　法

調査参加者：都内の公立小学校2校の5年生157名（男子84名，女子73名）と6年生106名（男子64名，女子42名），公立中学校2校の1年生125名（男子58名，女子67名），2年生133名（男子71名，女子62名），3年生160名（男子86名，女子74名），公立高校1校の1年生164名（男子78名，女子86名），2年生169名（男子83名，女子86名），3年生172名（男子83名，女子88名，不明1名）。

調査時期・方法：2009年12月から2010年1月に，各学校の教員が質問紙を配布・回収して実施した。

尺度）①自尊感情(22項目)：Rosenberg (1965)をもとに，他者との関係性を含めた尺度を作成し，「あてはまらない」から「あてはまる」までの4件法で測定した。

②挫折経験の頻度(3項目)：挫折経験1(ショック)「とてもショックで，これ以上自分は立ち直ることができないと思った経験」，挫折経験2(サポート)「とてもショックで，これ以上自分は立ち直ることができないと思ったけれど，まわりの人に助けてもらって，立ち直ることができた経験」，挫折経験3(自己成長)「とてもショックで，これ以上自分は立ち直ることができないと思ったけれど，そのおかげで自分が成長できたかなと思う経験」(神原(2010)参考)の頻度を，「まったく経験したことがない」から「たくさん経験したことがある」までの4件法で測定した。

結　果

自尊感情の因子分析：自尊感情尺度の因子構造を見るために，因子分析を行った。その結果，天井効果が見られた項目や因子負荷量が.35以下の項目を除き，「自己評価」「自己受容」「他者関係性」の3因子が見られた（Table 1参照）。「自己評価」は「自分の中には様々な可能性がある」などの，自己に対する期待を含むより認知的な評価に関連する因子であり，「自己受容」は「私は今の自分に満足している」などの，自分に対して抱くより基礎的な感情に関連する因子であった。また，「他者関係性」の因子は「私は人のために力を尽くしたい」などの，他者との関係性を含めた自己概念に関連するものだった。

また，小学校，中学校，高校ごとの自尊感情の因子分析も行った結果，すべて「自己評価」「自己受容」「他者可能性」の3因子が見られた。小学生は，第1因子が「自己受容」(α=.78)，第2因子が「他者関係性」(α=.76)，第3因子が「自己評価」(α=.75)であり，中学生も，第1因子が「自己受容」(α=.82)，第2因子が「他者関係性」(α=.69)，第3因子が「自己評価」(α=.56)であった。一方，高校生は，第1因子が「自己評価」(α=.87)，第2因子が「他者関係性」(α=.75)，第3因子が「自己受容」(α=.68)であった。

挫折経験頻度と自尊感情の学年差：挫折経験頻度は全学年において有意な差は見られなかったのに対

Table 1　自尊感情(全体)の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

【第1因子: 自己評価】α=.84			
3: 人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる	**.802**	−.329	−.111
15: 私には誰にも負けないもの(こと)がある	**.779**	−.158	−.085
6: 自分の中には様々な可能性がある	**.714**	−.040	.066
9: 私は自分の判断や行動を信じることができる	**.669**	−.100	.112
16: 自分にはよいところがある	**.654**	.200	.009
22: 私は人と同じくらい価値のある人間である	**.579**	.187	.081
10: 私は自分という存在を大切に思える	**.541**	.300	.058
4: 私は自分のことが好きである	**.537**	.338	-.036
【第2因子: 自己受容】α=.67			
13: 私は今の自分は嫌いだ	−.019	**−.811**	.102
7: 自分はダメな人間だと思うことがある	.264	**−.775**	.064
19: 自分は誰の役にも立っていないと思う	.107	**−.728**	−.098
1: 私は今の自分に満足している	.302	**.448**	−.008
【第3因子: 他者関係性】α=.68			
5: 私は人のために力を尽くしたい	−.103	−.012	**.796**
8: 私はほかの人の気持ちになることができる	.053	−.103	**.737**
2: 人の意見を素直に聞くことができる	−.039	.119	**.716**
14: 人に迷惑がかからないよう，いったん決めたことには責任を持って取り組む	.081	-.088	**.622**
因子間相関	**1**	**2**	**3**
1	—	.472	.494
2	—	—	.189

Table 2　挫折経験頻度と自尊感情の相関係数(全体)

	自尊感情	自己評価	自己受容	他者関係性
挫折経験1	−.095**	−.077**	−.281**	.076*
（ショック）	(1066)	(1107)	(1129)	(1133)
挫折経験2	.100**	.069*	−.127**	.173**
（サポート）	(1063)	(1104)	(1127)	(1130)
挫折経験3	.093**	.097**	−.129**	.177**
（自己成長）	(1067)	(1108)	(1129)	(1133)

*p<.05, **p<.01, 括弧内はN

Table 3　挫折経験頻度と自尊感情の相関係数（小学生）

	自尊感情	自己評価	自己受容	他者関係性
挫折経験1	−.070	−.043	−.157*	.021
（ショック）	(227)	(249)	(248)	(255)
挫折経験2	.125	.092	.025	.157*
（サポート）	(227)	(249)	(248)	(255)
挫折経験3	.167*	.193**	.074	.137*
（自己成長）	(227)	(249)	(248)	(254)

*p<.05, **p<.01, 括弧内はN

し，自尊感情は有意差が見られた。まず，小学校高学年においては，小学5年生の方が6年生よりも自尊感情が高く(t(212)=2.13, p<.05)，そのなかでも自己受容が高かった(t(212)=3.62, p<.001)。次に，小学校

Table 4　挫折経験頻度と自尊感情の相関係数（中学生）

	自尊感情	自己評価	自己受容	他者関係性
挫折経験1	−.183**	-.054	−.309**	.003
(ショック)	(383)	(405)	(390)	(404)
挫折経験2	.009	−.040	−.138**	.182**
(サポート)	(381)	(403)	(389)	(402)
挫折経験3	−.035	.035	−.164**	.116*
(自己成長)	(382)	(404)	(389)	(403)

*p<.05, **p<.01, 括弧内はN

Table 5　挫折経験頻度と自尊感情の相関係数（高校生）

	自尊感情	自己評価	自己受容	他者関係性
挫折経験1	.035	.094*	−.239**	.032
(ショック)	(455)	(464)	(475)	(470)
挫折経験2	.228**	.249**	−.088	.181**
(サポート)	(454)	(463)	(474)	(469)
挫折経験3	.227**	.240**	−.110*	.185**
(自己成長)	(457)	(466)	(477)	(472)

*p<.05, **p<.01, 括弧内はN

から中学校に学校が変わる小学6年生と中学1年生との間では，自尊感情全体の有意差は見られなかったが，そのなかの自己評価(t(207)=2.82, p<.01)と自己受容(t(216)=2.05, p<.05)は，小学6年生の方が中学1年生よりも高かった。さらに，中学校から高校に変わる中学3年生と高校1年生の間では，中学3年生の方が高校1年生よりも自尊感情が高く(t(308)=3.86, p<.001)，そのなかでも自己評価(t(317)=2.78, p<.01)と他者関係性(t(317)=2.94, p<.01)が高かった。

また，有意な差ではないが，中学生においては，中学3年生の方が1年生よりも他者関係性の自尊感情が高い傾向が見られた(F(2, 409)=2.70, p<.10)。さらに，高校生においては，高校3年生の方が1年生よりも自尊感情が高い傾向が見られた(F(2, 474)=2.65, p<.10)。

尚，小学5年生から高校3年生までの自尊感情の平均値は，Table 1に示した。

挫折経験頻度と自尊感情の関連：挫折経験頻度と自尊感情の関連を見るために，小学校高学年から高校までの全体，小学生，中学生，高校生それぞれにおいて，両変数の相関係数を算出した。まず，全体では，挫折経験1（ショック）の頻度と自己受容が，有意な弱い負の相関を示した（Table 2参照）。つまり，これ以上立ち直ることができないと思うようなショックな経験をしているほど，自己受容が低いということである。次に，小学生では，非常に弱い相関ではあるが，挫折経験3（自己成長）の頻度と自己評価が有意な正の相関を示した（Table 3参照）。すなわち，非常にショックな出来事によって自分が成長できたと思える経験をしているほど，自己評価に関連する自尊感情が高いということである。さらに，中学生では全体と同様に，挫折経験1（ショック）の頻度と自己受容が，有意な弱い負の相関を示した（Table 4参照）。

以上のように，挫折経験頻度と自尊感情の弱い有意な相関は，小学生と中学生では1つずつしか見られなかったのに対し，高校生ではいくつか見られた（Table 5参照）。まず，挫折経験1（ショック）の

頻度と自己受容が，有意な弱い負の相関を示した。また，挫折経験2（サポート）も挫折経験3（自己成長）も，自尊感情や自己評価と有意な弱い正の相関を示した。

考　　察

本研究では，小学校高学年から高校までの発達的特徴に焦点を当てて，挫折経験の頻度と自尊感情との関連を調べた。その結果，まず，どの学年にも共通して自尊感情は「自己評価」「自己受容」「他者関係性」の3因子から成ることが明らかになった。しかし，特に中学生において，第3因子の「自己評価」は十分な信頼性が得られたとは言えないため，学年によっては以上の3因子で自尊感情をとらえられない可能性が考えられる。今後は，青年の自尊感情を測定する尺度について更なる検討が求められるだろう。

次に，挫折経験の頻度には有意な学年差が見られなかった。この結果から，これまでに挫折を経験してきた頻度は，年齢とともに増えていくわけではないことが考えられる。一方で，自尊感情には有意な学年差が見られた。特に，「中1ギャップ」と呼ばれる小学6年生から中学1年生の間で，中学1年生の方が自己評価も自己受容も低いことは，注目に値する。同様に，学校が変わる中学3年生と高校1年生の間で，高校1年生の方が自己評価と他者関係性に関連する自尊感情が低かったことも，注目すべき結果である。以上の結果から，小学校から中学校へ，中学校から高校へと学校が変わると自尊感情が低まる可能性が示されたが，本当にこのようなことが起こり得るのか，また，もしそうだとすれば何が原因となっているのかについて，今後は検討してく必要があるだろう。

しかし，このように年齢とともに自尊感情が低下する可能性が示唆されたにも関わらず，中学3年生と高校3年生で自尊感情が高まる可能性も示された。これら2つの学年に共通する点の一つとして，自分の今後の進路を決定する時期であるということが考えられる。今後は，この関連についても調べる必要がある。

最後に，挫折経験の頻度と自尊感情の関連については，小学生や中学生では両変数の弱い相関が1つずつしか見られなかった。それに対し，高校生では，ただショックでそこに意味づけが付与されてい挫折経験は自己受容を低めるが，他者や自己に関する意味づけが付与されている挫折経験は自己評価を高めるという構造が見てとれた。この結果から，年齢とともに挫折経験に対してより精緻化した意味づけを行えるようになり，それによって自己評価に関連する自尊感情が高まりやすくなるのかもしれない。今後は，挫折経験の内容にもっと焦点を当て，自尊感情との関連をより詳細に検討してく必要があるだろう。

注

1)　本研究は，東京都教育委員会から慶應義塾大学への受託研究の一部である。

引用文献

Crocker, J., & Wolfe, C. T.(2001) Contingencies of self-worth. *Psychological Review*, 108, 593–623

神原知愛（2010）青年期後期の挫折観に関する心理学的考察―失敗観との違いに注目して―慶應義塾大学三田哲学会『哲学』123集，185–205.

溝上慎一（1999）自己の基礎理論―実証的心理学のパラダイム―金子書房

Rosenberg, M. (1965) S*ociety and adolescent self image*. Princeton University Press.